国史跡陸奥国分寺跡発掘調査　遺跡見学会資料

陸奥国分寺鐘楼解体・復元修理工事について

令和元年 11 月 30 日
仙台市教育委員会文化財課

事業の概要

(1)事業について

事業名：名勝　おくのほそ道の風景地　木の下及び薬師堂
歴史活き活き！史跡等総合活用整備事業

事業内容：名勝「おくのほそ道の風景地」のうち、木の下及び薬師堂の重要な構成要素である陸奥国分寺鐘楼について、経年劣化や東日本大震災により破損し、倒壊の恐れが高いことから、解体・復元修理を行います。

事業者：宗教法人陸奥国分寺

事業期間：３ヶ年（平成 31 年度～令和３年度）（予定）

(2)建物について

陸奥国分寺鐘楼は、入母屋造鉄板葺の二階建てであり、桁行3間(5.0m)、梁間2 間(3.8m)の規模の袴腰鐘楼です。江戸時代の建築として、仙台市登録有形文化財に登録されています。

解体工事の成果

（1）工事概要

平成 31 年７月中旬～11 月中旬にかけて、礎石及び袴腰台石を残し、屋根から土間コンクリートまで、鐘楼をすべて解体しました。部材は調査のうえ、再度使用できるよう保管庫に保管しています。鐘楼に吊られていた梵鐘は、光明殿に仮移設しました。現在は調査成果に基づき、復元に向けた設計を行っているところです。

（2）破損状況

・屋根周りの部材や、中央通し柱は大きく腐食していました。
・桁や通し肘木、高欄はケヤキ材で、曲がってしまった材が多いことが確認されました。

（3）主な調査成果

現在の鉄板葺の下にこけら葺きが残されていたことから、以前はこけら葺きであったことが分かりました。また、柱に残る痕跡から、出入口は東側にあったと推測できます。

斗に 2 種類の樹種が使われていること、野垂木が二重に打たれていることから、大規模な修理が複数回行われたことが分かりました。上側の野垂木にも和釘が使われていることや、棟束などに蛤刃チョウナの加工痕が確認されたこと、江戸時代の絵図資料などを考え合わせると、現在の鐘楼は、江戸時代初期に建築されたものであり、当初は瓦葺きであった可能性が高いと考えられます。

このほか、縁板や斗に独特な手法が確認されました。

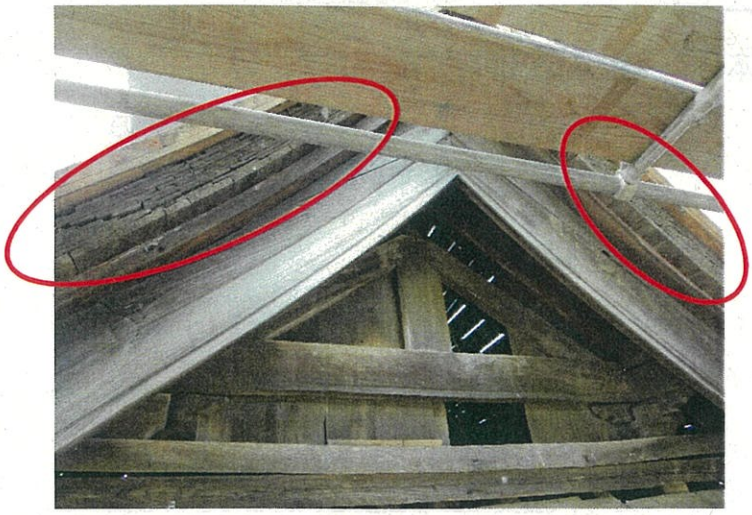

写真１　鉄板葺の下に残されたこけら葺き

写真２　蛤刃チョウナの加工痕

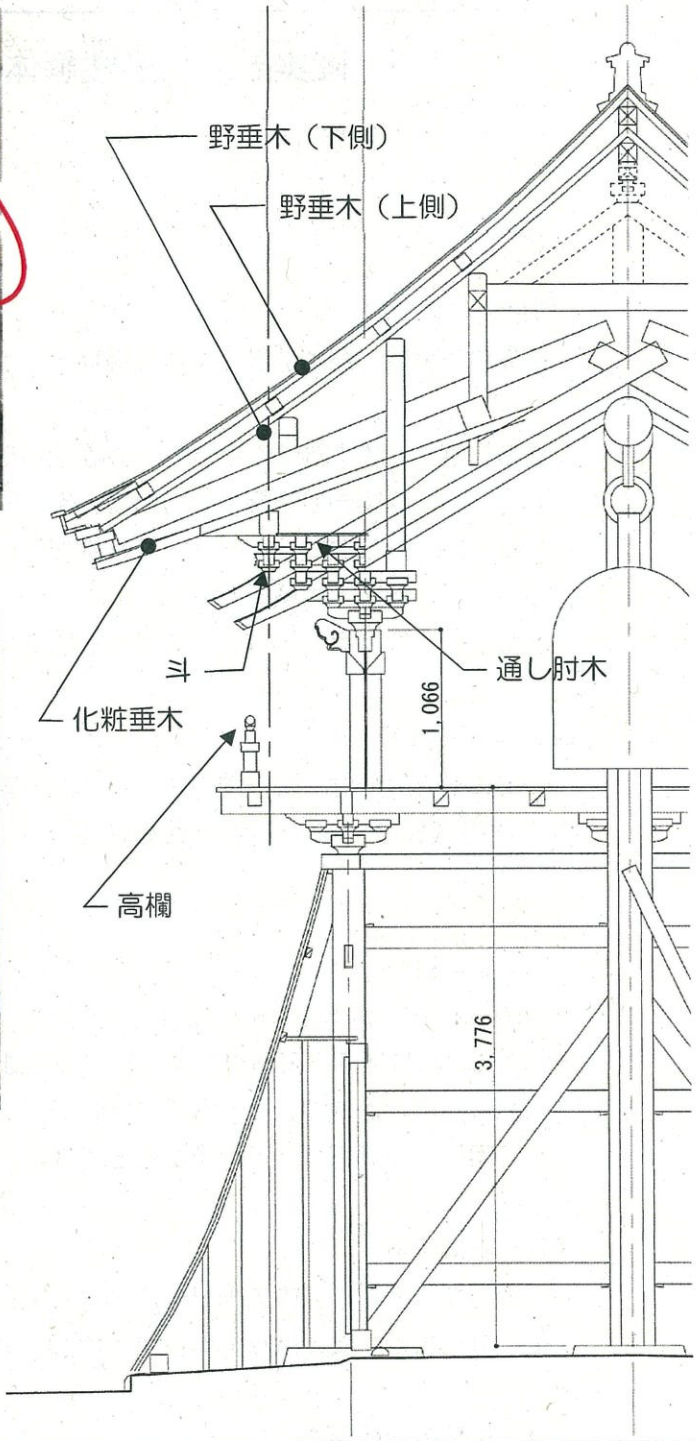

図１　現状梁間断面図

名勝「おくのほそ道の風景地」について

松尾芭蕉とその弟子の曾良が訪ね、『おくのほそ道』及び『曾良旅日記』に書き留めた場所であり、往時を示すよすがとなる優れた景観を今に伝えるとして、12県25ヵ所が一括して国の名勝に指定されています。「木の下及び薬師堂」は、元禄２年（1689）５月に芭蕉らが訪れた場所であり、歌枕として知られる宮城野の先にあって、日影も漏らさぬほどの松林の様子が、「木の下」の地名と、東歌の「みさぶらひみかさ」の一節を芭蕉に思い起こさせたと記されています。この場所は、天平13年(741)の聖武天皇の詔によって国ごとに造られた国分寺の１つであり、江戸時代には仙台藩によって、薬師堂（重要文化財）をはじめとして、仁王門（県指定文化財）や鐘楼（市登録文化財）などの諸建築が整備されていました。また、俳句に関わるものとして、芭蕉が仙台城下の居宅を訪ねた大淀三千風の供養碑や、駿河の俳人が建立した芭蕉句碑が建っています。